



秋の七草 ークズー

暑さの厳しい7月から9月にかけて、陶史の森に、秋の七草の一つである「葛」の花が咲きます。マメ科らしい蝶形の小花が下から順に咲き、花に近づくとブドウのような甘い香りがします。色は赤紫が一般的ですが、白やピンクの花もあります。

つる性の植物であるクズは、河原の土手や荒地など日当たりのいいところに生えます。その勢いは旺盛で、時には木々を覆い尽くすため厄介者扱いされることも少なくありません。しかし、実は古くから私たちの生活を支えてきま

した。葛の根からは良質のデンプン（くず粉）が採れ、葛湯や葛餅、葛切り、葛まんじゅうなどの材料に重宝されます。また、漢方薬の「葛根湯」として風邪の引き始めなどにも使われています。

「ハギ・キキョウ・クズ・オミナエシ・フジバカマ・ススキ・ナデシコ」は、秋の訪れを告げる「秋の七草」です。食を楽しむ春の七草とは違い、秋の七草は見て楽しむもの。まだまだ厳しい残暑が続きますが、身近に咲くクズの花に、一足早い秋の気配を感じてみてはいかがでしょうか。

陶史の森からのご案内

バードウォッチング（自由参加）

8月23日（日）、9月27日（日）

午前9時～11時

草木染め教室（要申込 定員10人）

9月26日（土）午前9時～11時

陶史の森まつり

9月5日（土）午前9時～正午

※雨天順延 9月6日（日）

トキハク
プロジェクト

新博物館準備だより

学芸員は、いま何してる？

美濃陶磁歴史館
(☎55-1245)

第28回 徳利の町のもう一つの顔 下石と碇子

電線に取り付けられている「碇子」という器具をご存じですか。碇子とは、電柱や鉄塔で電線を支え、電気が外に逃げないようにする焼き物の部品です。日本では、明治10年代以降、全国各地に電力会社が発立され、電力事業の発展に伴い碇子が各地で生産されるようになりました。

土岐市では、明治20年代初め頃から下石で生産が始まりました。下石は徳利で有名な町ですが、碇子の産地としても美濃窯を代表するまでに発展しました。その背景には、地元で採れる良質な白い粘土の存在があります。不純物が少なく、熱に強く粘りのある粘土は、高い電圧に耐える碇子づくりに適していました。

さらに、林浪九郎や林蔭次郎といった先駆者の存在も大きく影響しました。林浪九郎は、日本初の高圧に耐えられる碇子の製造に成功し、電力普及を支える重要な役割を果たしました。また林蔭次郎は、碇子を効率よく作る機械を考案し、「実用新案（新しい工

夫や発明を国に認めてもらう制度」で第1号に登録されるなど、技術面で大きな足跡を残しました。

しかし、こうした下石の碇子づくりの歴史は、現在ではあまり知られていません。ぜひ一度、身近な電柱や鉄塔を見上げてみてください。そこにある碇子は、日本の電気の普及と近代化を支えてきた、小さくも大切な存在です。



電柱で使われている碇子



林浪九郎（大正13年）